日本の音楽芸術の礎を未来に
東京藝術大学奏楽堂改修へご支援を！

上野の森には新旧二つの奏楽堂がある。
日本最古の洋式音楽ホールを擁する重要文化財の旧東京音楽学校奏楽堂。
そして、１９９８年竣工の東京藝術大学奏楽堂（以下、藝大奏楽堂）である。
今回のプロジェクトの舞台となる藝大奏楽堂も老朽化が著しく、全面的な改修が急がれる。
若きアーティストにとっての芸術拠点を未来へつなぐために、ぜひあなたのご支援を。

写真・石塚定人（ポートレート）、秋山枝穂　文・小田島久恵



Diners Club Artist Support Program　**Save Of Sogakudo**

東京藝術大学で音楽を学ぶ者にとって、その空間で演奏することが一つの目標であり、ステイタスでもある藝大奏楽堂は、１９９８年に竣工した上野キャンパス内のホールで、その前身であった旧東京音楽学校奏楽堂（明治23年創設）は、重要文化財として上野公園内に保存されている。竣工から27年を経た藝大奏楽堂も老朽化が著しく、２０２８年から始まる大改修は大学予算と国からの補助金では約10億円が不足する見込み。「藝大奏楽堂大規模改修プロジェクト」では、大学関係者に留まらず幅広い層からの寄付を募っている。藝大奏楽堂に未来の芸術の可能性を託す、東京藝術大学音楽学部長の杉本和寛氏にお話しいただいた。

「奏楽堂は演奏会だけでなく、試験や、入学式や卒業式のようなセレモニーにも使われますし、オルガンの練習にも使われるため、年間８割以上稼働しています。オーバーホールの期間もとりづらい状況で、劣化の速度が速く、震災時にもダメージがあったと思われます。客席はイタリア製の革を使ったもので見た目はいいのですが、硬くて座り心地が悪く、それも変えなければならないと思っています。ご寄付いただく際に、座席にネームプレートが付けられ（50万円以上）、先着１００名で現在も募集しているところです」

コロナ禍では、若手アーティストをサポートするクラウドファンディング「パワー・トゥ・ジ・アーツ」が予想を上回る額を集めた。

「奏楽堂についても当初クラウドファンディングの話があったのですが、直接足を運んでくださる方からご支援をいただきたいという考えに至りました。一時的に話題になるだけではなく、実際に奏楽堂に来ていただき、直接音楽を聴いていただいて、若い可能性のある学生を継続的に支援していただきたいのです。若い人たちの才能をすくい上げて、大学にいる間だけではなく、卒業後も長期的に応援してほしい。そのための基盤が奏楽堂なのです」

大学の門をくぐった先に立つ「閉じたホール」のイメージを覆すため、学生オペラのゲネプロへの招待や、現役藝大生や卒業生による子どもたちを対象とした音楽体験コースも考案中だという。

「社会とつながりを持ちつつ、音楽の専門家として学ぶ学生たちの未来もサポートしたい。２０００年頃からの卒業生には、奏楽堂でソリストとして演奏することが登竜門になっていると思います。成績上位の学生は次の年に藝大オーケストラと共演する経験もできますし、将来プロとして羽ばたくために不可欠なステージが奏楽堂なのです」



杉本和寛

すぎもと かずひろ｜東京藝術大学音楽学部長、言語芸術・音楽文化学教授。博士（文学）。専門は西鶴や浮世草子などの日本近世文学。編著に、『文化としての日本のうた』（共編、東洋館出版）、『西鶴と浮世草子研究 Vol.3〈金銭〉』（共編、笠間書院）など。



竣工から27年、高い稼働率もあって、正面回転扉の動作の不具合や外壁の錆浮きなど施設各所に経年劣化が顕著。天井裏の可変天井のワイヤー部分（右）と舞台袖の手動の音響反射板のギア部分（左）。

奏楽堂の思い出
～若手音楽家の声～



藝大オペラ《フィガロの結婚》ケルビーノ役でのオペラデビューは、「世界の舞台へ挑戦したい」という夢が芽生えた、かけがえのない演奏体験でした。2024年夏には、ロッシーニ・オペラ・フェスティバル《ランスへの旅》コルテーゼ夫人役でのイタリアデビューが叶いました。奏楽堂は私を世界の舞台へ導いてくれた大切なステージです。これからも藝大生に夢と希望を与え、背中を押してくれる場所であってほしいと、心から願っています。



©Taira Tairadate

石田 滉
声楽（メゾソプラノ）

いしだ きらら｜千葉県出身。東京藝術大学音楽学部声楽家卒業。同大学院オペラ専攻を首席修了。藝大オペラ《フィガロの結婚》ケルビーノ役でデビュー。ソリストを多数務めるほか、現代音楽の新曲初演も行う大注目のメゾソプラノ。
https://kilaraishida.com

＊

人生初のオーケストラ演奏も、藝大フィルとチェロ協奏曲を共演した貴重な機会も奏楽堂の舞台でした。サロン規模とは異なり、大ホールでは音をどう届け、どのくらい表現の幅を広げられるかを肌で学びました。この感覚は、現在さまざまな本番の場面で活きています。また入学式や卒業式で聴いた、奏楽堂いっぱいに響くパイプオルガンの音色は圧巻で、今も鮮明に記憶に残っています。奏楽堂は私にとって、音楽家としての原点そのものです。



松谷壮一郎
チェロ

まつたに そういちろう｜福井県出身。東京藝術大学音楽学部器楽科チェロ専攻卒業。同大学院音楽研究科修士課程在学中。ビバコンクール第3位。ソリストとしてセントラル愛知交響楽団、藝大フィルハーモニア管弦楽団と共演。室内楽カルテット風雅メンバー。
https://www.instagram.com/soichi_m/

奏楽堂大規模改修プロジェクト
https://www.fund.geidai.ac.jp/projects/sogakudo-sos/